

組織的な発達支持的生徒指導

ー中学校入学への不安に着目してー

南国市立北陵中学校 教諭 田所 孝浩

鳴門教育大学大学院学校教育研究科高度学校教育実践専攻 指導教員 小坂 浩嗣

【研究の概要】

本研究は、小学校6年生・中学校1年生を対象に、組織的に生徒の学校適応を支援するために効果的なアセスメントと学習活動の在り方を検討することを目的とした。アセスメントには学校生活アンケートを、学習活動にはSELを実施し、学年団で生徒の様子を経過観察しチーム支援するサポートシステムの開発に取り組んだ。その結果、入学前から定期的にアンケート調査を実施することで、学習・先生・部活・友達に対する不安感の変動をつかむことができた。それを踏まえ、SELの学習では、短時間ながら10分間のモジュール学習によるプログラム化により教室内に心理的安全性が保たれる空気感を醸成する効果があった。

【キーワード】 学校生活アンケート SEL 不安 生徒理解

1 はじめに

全国的に、中学校入学後、不登校生徒数は増加する傾向にある。学年別不登校児童生徒数において、小学6年生での不登校児童数に対する中学1年生での不登校生徒数の増加率が約1.8倍で、他の学年間の増加率に比べてかなり高い（文部科学省，2022）。中学校入学前後に、生徒の心の変化の理解や支援の必要性は高い。

コロナ禍以後、不登校児童生徒数は増加し続けている状況において、不登校対策は喫緊の課題となっている。事後対応ではなく、不登校を未然防止する視点に立ち、切れ目なくかつ組織的にサポートし続ける発達支持的生徒指導の考えに着目し、本実践研究に着手することにした。高知県は、教科担任のタテ持ちを導入したことで、学年団の中でも授業を持っていないクラスについて、生徒の把握や情報共有の困難さが増大し、学年団による横の連携・協働が崩れる傾向がみられ、チーム支援体制の再構築が課題である。課題解決の第一歩として、中学校入学前後に学級・学年に心理的安全な学習環境の基礎固めを目標に、学年団を基礎として組織的生徒指導に取り組み意義は大きいと考える。

2 研究の目的と方法

(1) 目的

生徒が学校生活への不適応に陥り、不登校に至るのを食い止めるためには、教師は生徒の心の変化に気づき、生徒が学校に適応できるよう支援すべきは言うまでもない。支援については、特に非認知能力の育成に焦点化した学習活動を仕掛けることにより、生徒が自ら学び考え成長していく可能性を増幅できると考える。そこで、本研究では、組織的に生徒の学校適応を支援するために効果的なアセスメントと学習活動の在り方を検討することを目的とした。アセスメントとしては学校生活アンケートを、学習活動としてはSELを実施し、学年団

で生徒の様子を経過観察し、チームで指導支援することにより、教師は生徒の心の変化を見逃さず声がけができ、生徒も社会性が高まることによって自ら学び考えていくことにつながっていくと考えた。

(2) 対象

南国市立北陵中学校 1 年生（59 名）である。第 1 回学校生活アンケートのみ、南国市教育委員会を通じて、校区内 5 校の小学校に依頼し、実施した。学校生活アンケートについては、終礼や特別活動の時間など学級担任の裁量で、4 回実施した。実施方法は、Google Forms を用いて児童もしくは生徒本人自ら送信することとした。SEL については、特別活動や総合的な学習の時間など学級担任の裁量で可能な時間に 13 回の実施となった。

(3) 方法

学校生活アンケートについては、学習・先生・部活・友達の不安感を問う自由記述式で実施した。この項目設定について、中島ら（2023）を参考にしている。各項目には、不安の内容と不安の理由について自由記述により回答を求めた。分析方法は、樋口が開発したフリーソフトウェアの KHCoder を用いた。KHCoder とはテキスト型でのデータ分析方法である計量テキスト分析を行うためのフリーソフトウェアである。（樋口，2014）学習・先生・部活・友達それぞれの不安の内容については対応分析で、またそれぞれの不安の理由については共起ネットワークを用いて分析した。

社会性と情動の学習（Social Emotional Learning；以後 SEL と略記する）は、非認知能力を高める学習として実施した。M. スプレnger（2022）の考えを元に、共感力・自己認識力・自己管理能力・社会認識力・人間関係力・意思決定力の 6 つの力を 1 回以上は取り扱う 4 つの単元を設定した。学級担任を授業者とし、朝読書の時間の 10 分間行った。振り返りは、自分自身の学び・他者からの学び・学びのつながりを観点に実施した。分析は、振り返りの記述から、非認知能力の 6 つの力について変容を読み取っていった。

3 実践の結果

(1) 学校生活アンケート

ア 学習

学習に対する不安について、3・4・5・7 月の対応分析の結果を図 1～4 に示した。3 月では、学年全体で最も不安を感じているのは“数学”で、若干 B 組の方が“数学”への不安を持つ生徒が多い。一方、A 組の一部の生徒は現段階から“テスト”について不安を持っている生徒がいることが読み取れる。4 月は、3 月時と同じく“数学”の不安感が高い。それぞれの特徴では、A 組は“英語”，B 組は“理科”に不安を持っている。また“テスト”への不安感が両組に表われてきた。5 月になると、“テスト”の不安が最も多くなり、7 月になると、再度“数学”と“英語”への不安が中心になってきた。

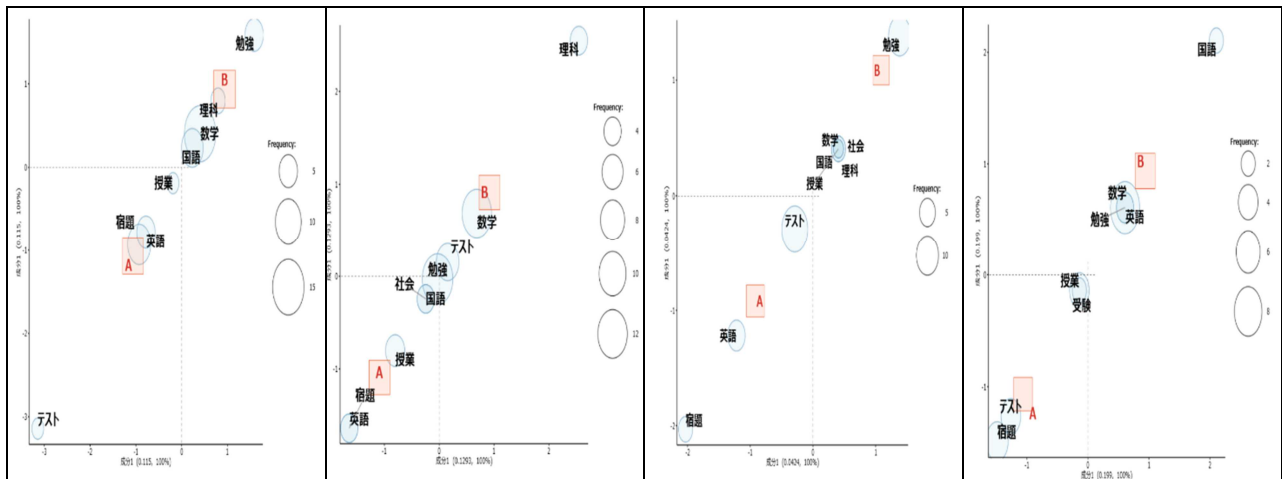


図1 対応分析(3月・学習) 図2 対応分析(4月・学習) 図3 対応分析(5月・学習) 図4 対応分析(7月・学習)

学習に対する不安の理由について、3・4・5・7月の共起ネットワーク分析の結果を図5～8に示した。3月は、“難しい”や“苦手”が不安につながるのを読み取れるが、“英語”は“苦手”と線がつながっていないため、“英語”に対して、入学前は不安意識がないことがわかる。他には、“宿題”の“量”を気にしている生徒や“希望”の“高校”に進学できるかを意識している生徒がいることも読み取れる。4月は、“小学校”との違いに戸惑っている生徒がいることがわかる。具体的には、“授業”展開の“スピード”や“授業”の“内容”，各教科の“覚える”ことの多さといったこと挙げられる。5月では、“テスト”の“影響”を強く意識し始めている。そして、7月は、各“教科”で“覚える”ことの“増加”が苦手意識を生み出し、不安感を増している。“テスト”についての不安は継続している。

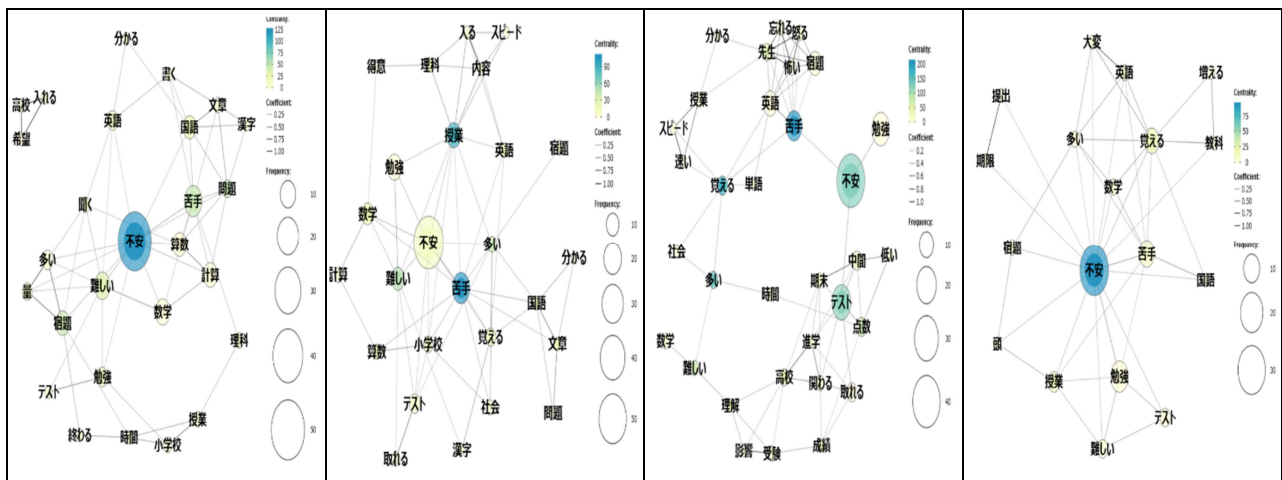


図5 共起ネットワーク

(3月・学習)

図6 共起ネットワーク

(4月・学習)

図7 共起ネットワーク

(5月・学習)

図8 共起ネットワーク

(7月・学習)

イ 先生

先生に対する不安について、3・4・5・7月の対応分析の結果を図9～12に示した。3月は、A組では、先生の“人柄”を気にしたり、“サポート”を求めたりすること、B組では、初めて経験する“教科担任”制への不安が読み取れる。4月は、“コミュニケーション”が学年の中心に表われた。ただ、A組の“人柄”やB組の“教科担任”は継続した。5月と7月はほぼ同様に、中心が“人柄”に変わった。また、A組では先生の“サポート”を求めている生徒が復活した。

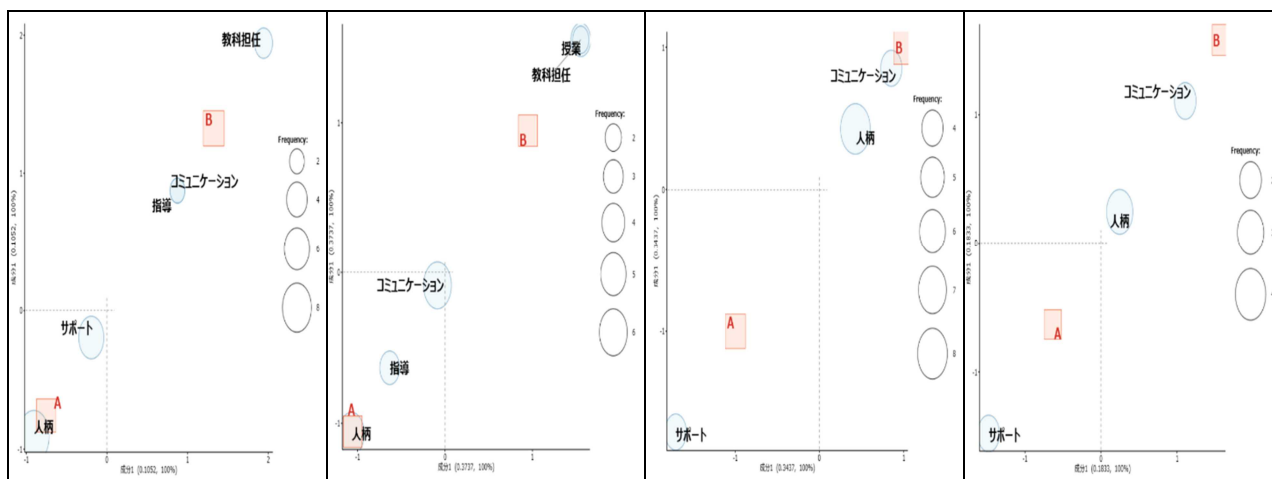


図 9 対応分析(3月・先生) 図 10 対応分析(4月・先生) 図 11 対応分析(5月・先生) 図 12 対応分析(7月・先生)

先生に対する不安の理由について、3・4・5・7月の共起ネットワーク分析の結果を図13～16に示した。3月は、“中学校”の先生は“怖い”や“話”を聞いてくれない、“寄り添って”くれないのではないかなど否定的なイメージを持っていることがわかる。4月は、3月での不安に加えて、“中学校”は“教科担任”制であるため、授業で関わる先生が増えたことによって、先生の“名前”を“覚える”ことや、“敬語”を使って話すことの不“慣れ”によって不安を感じている生徒もいる。5月は、先生への“理不尽”や“怒る”といった否定的な感情が多く見られるようになった。7月は、“自分”という単語の中心性が高くなっているが、これは“自分”が大きな問題を起こしたときに先生は“自分”を信じてくれるか、先生が“自分”の話を聞いてくれるかという不安であった。

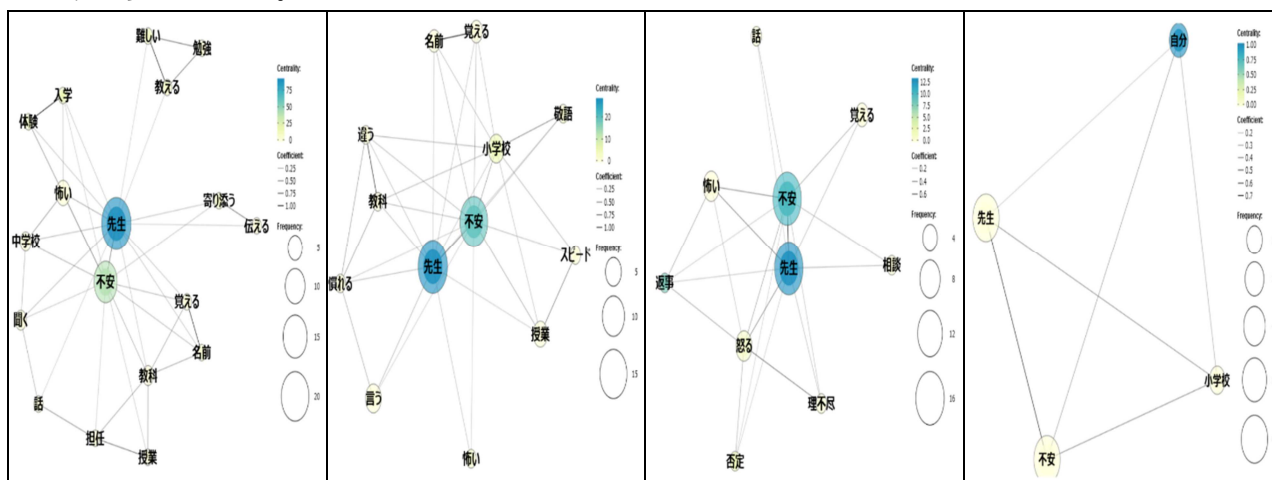


図 13 共起ネットワーク (3月・先生) 図 14 共起ネットワーク (4月・先生) 図 15 共起ネットワーク (5月・先生) 図 16 共起ネットワーク (7月・先生)

ウ 部活

部活に対する不安について、3・4・5・7月の対応分析の結果を図17～20に示した。3月は、部活は中学生から始まる活動であるため、分からないことが多く、“練習”内容や“時間”，“先輩”や“コミュニケーション”が不安の中心となっている。部活に入部しないと決めている生徒も一定数いる。4月は“先輩”と“継続”が不安の中心になってきた。5月は、部内での“トラブル”が発生していることや“成果”を気にしていることがわかる。7月は、“継続”が表われなくなり、部活に慣れてきて、部活を辞める気持ちがなくなってきた生徒が多い。

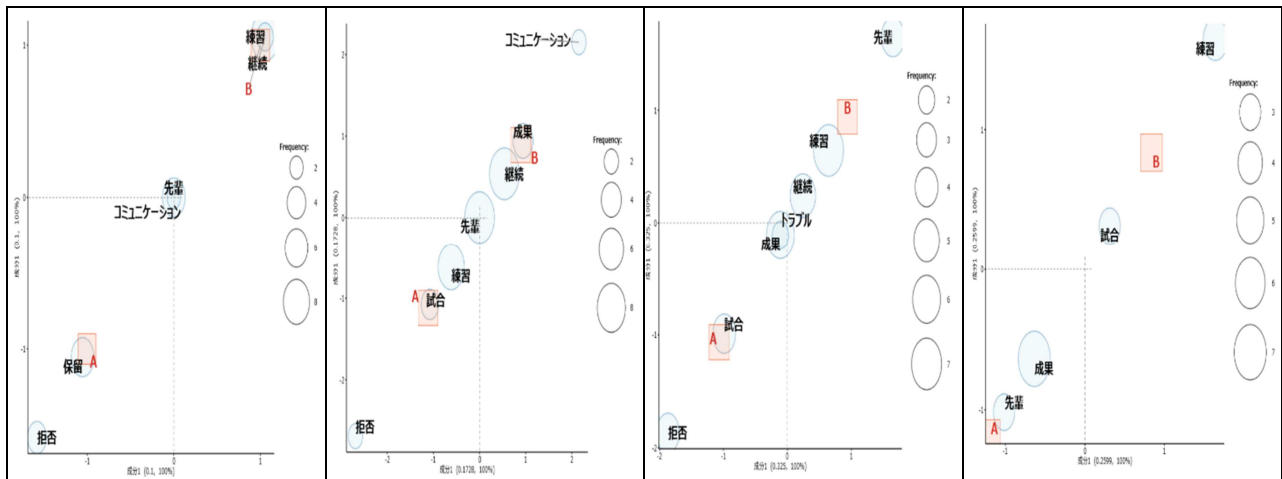


図 17 対応分析(3月・部活) 図 18 対応分析(4月・部活) 図 19 対応分析(5月・部活) 図 20 対応分析(7月・部活)

部活に対する不安の理由について、3・4・5・7月の共起ネットワーク分析の結果を図21～24に示した。3月は、一日“体験入学”で部活を見たとはいえ、日々の活動として行うことへの不安を持ち、入部自体を“迷う”児童も一定数いる。4月は、この時期では“入部”することに迷っている生徒はほぼいなくなり、部活に“馴染める”のかといった、次の不安感を感じている生徒がいる。5月は、“練習”が“大変”になり、“部活”自体への不安感の高まりが表われている。7月は、不安感に落ち着きが見られ、新たに“練習”，“予定”を気にしている生徒がいる。夏休みの予定を気にしていて、気持ちに余裕が見られている。

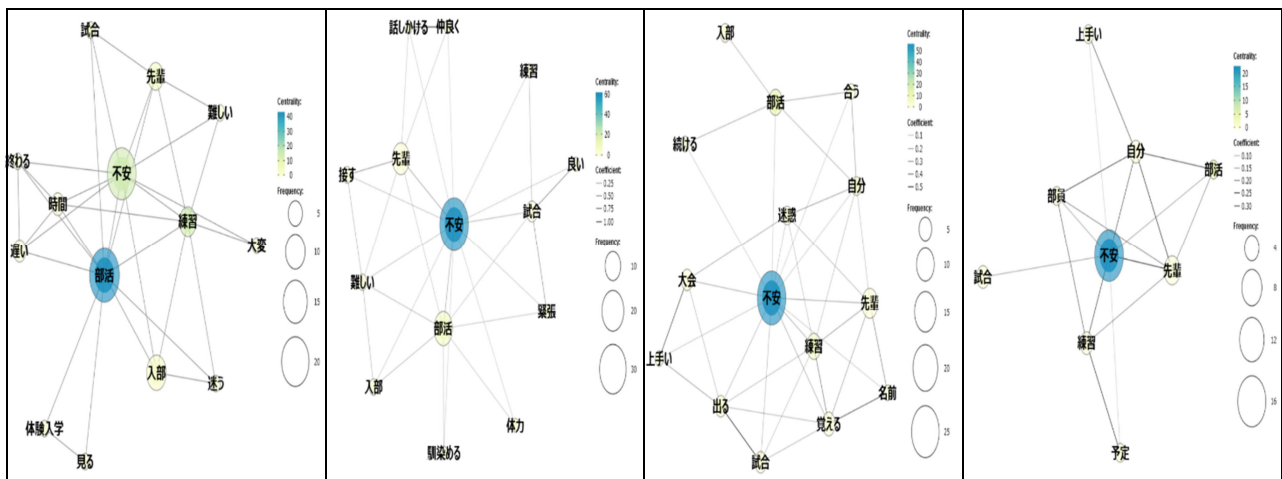


図 21 共起ネットワーク (3月・部活) 図 22 共起ネットワーク (4月・部活) 図 23 共起ネットワーク (5月・部活) 図 24 共起ネットワーク (7月・部活)

エ 友達

友達に対する不安について、3・4・5・7月の対応分析の結果を図25～28に示した。3月は、不安の多くは“友達作り”のことだった。またB組と特徴としては、クラス“編成”や“コミュニケーション”の不安がある児童もおり、小規模校の児童にとって、初めてのクラス“編成”は大きな不安を生み出していることがわかる。4月は、A組の特徴としては友達同士の“トラブル”のことが、B組では“友達作り”が不安の中心となっている。5月は、“友達作り”がA組の特徴へ、また“コミュニケーション”がB組の特徴へと変化していつている。7月は、A組・B組とも“トラブル”が中心になった。また、7月では“友達作り”の不安はA組に移行した。

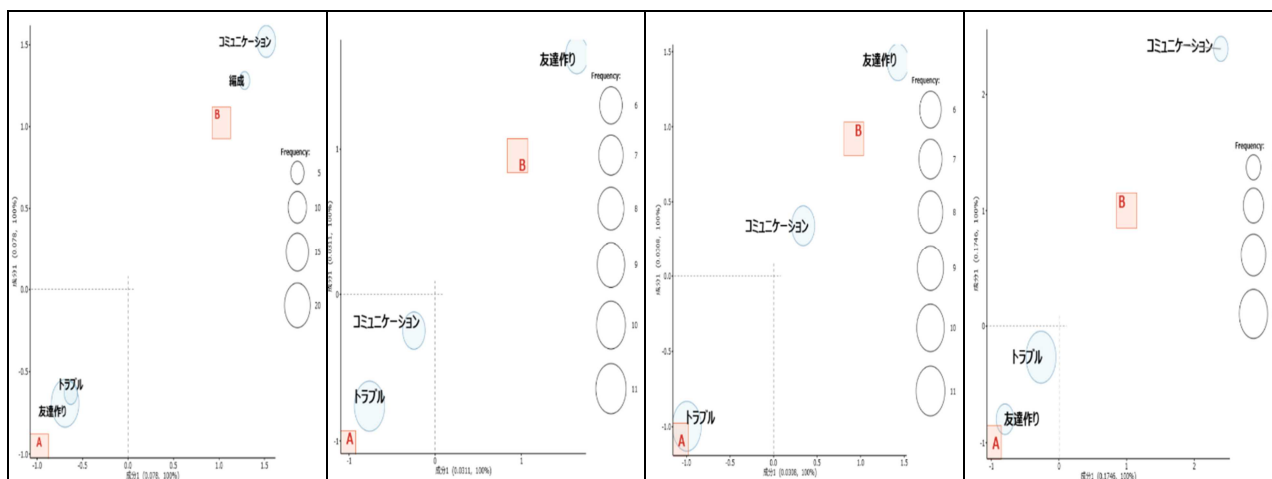


図 25 対応分析(3月・友達) 図 26 対応分析(4月・友達) 図 27 対応分析(5月・部活) 図 28 対応分析(7月・友達)

友達に対する不安の理由について、3・4・5・7月の共起ネットワーク分析の結果を図 29～32 に示した。3 月は、“他校”から児童と“仲良く”なれるか、友達の“名前”を“覚え”られるかなどが挙がり、“人見知り”故に、不安が増している。4 月は、“他クラス”とのつながりを深めたいことが表われた。一方で、まだ“仲良く”“話しかける”ことに抵抗感がある生徒も一定数いる。5 月では、グループ LINE での“喧嘩”が見られ始めたことが読み取れる。そして、図の上半分が B 組の不安、下半分が A 組の不安となり、組の風土の違いが顕著に表われている。7 月は、実際の問題行動が書かれている。友達関係を“上手”くやっていきたいという思いが見られている。

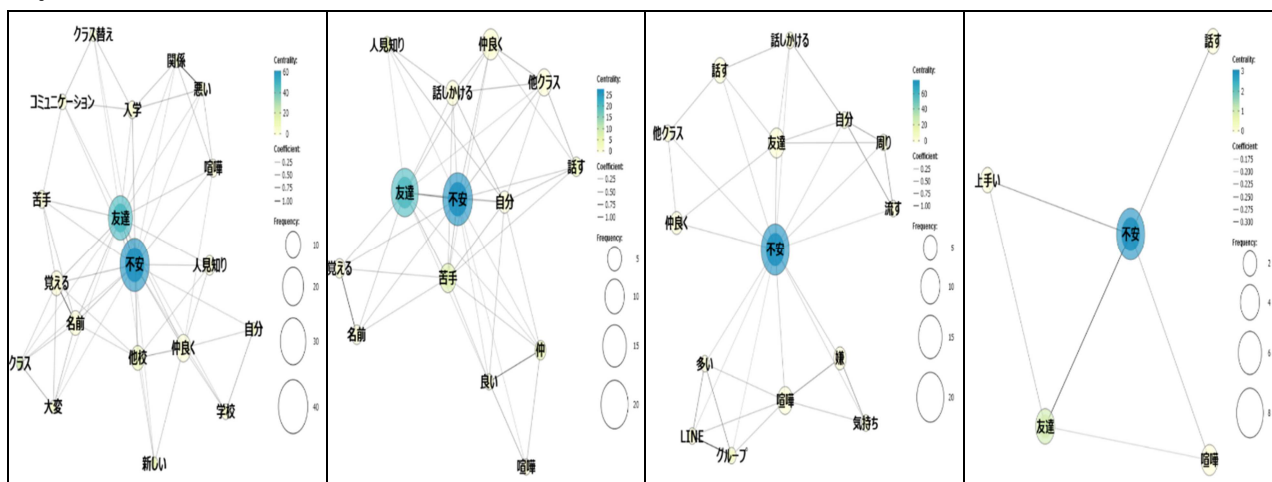


図 29 共起ネットワーク

図 30 共起ネットワーク

図 31 共起ネットワーク

図 32 共起ネットワーク

(3月・友達)

(4月・友達)

(5月・友達)

(7月・友達)

(2) SEL

設定した 4 単元の自己感情理解、他者感情理解、自己感情コントロール、問題解決スキルについて、各単元の最終回に振り返りを実施した。振り返りは、①自分自身の学び②他者からの学び③学びのつながりを観点にワークシートに記入もしくは生徒による発表形式とした。しかし、授業が 10 分間と短かったため、他者からの学びを省略したり、記述が少なかったりしたこともあり、①と③について分析した。

ア 自己感情理解

①については、“入学式の際はネガティブな気持ちが多かったが、今はポジティブな気持ちが多くなっていた。”“自分の感情をグラフに表すことで自分がどのような気持ちなのかしっかり分か

ることができた。“といった記述から、自分自身の心の状態を知るという第一歩を踏み出していると思われる。③については、“何かあった時も、一回気持ちを落ち着けて、物事を進めて行きたい。”“自分の感情をとじこめず、その日その時の感情を表に出したいです。あと、自分の感情を大切にしたいです。”といった記述から、気持ちの安定を第一に考えながらも、感情表出の重要性に意識をおいている生徒もいた。

イ 他者感情理解

①については、“自分が思った考えが普通だと思っていたけど、他の人の意見を聞いて考え方が違うなと思いました。”“班の人と同じ意見が多かったのが嬉しかったです。いろんな考え方があったことが分かりました。”と生徒から発表があった。多様性に気づき、自らの成長につながっていることも分かったが、一方で、無意識の中での同調性も見られた。③については、“友達とケンカになった時には、相手の話もきけるようにしたいです。”“こういう時があったら、先に向こうの理由をきいてみようと思います。”といった発表をしていた。ここで共通するのは“きく”というところで、“きく”には、耳から入ってきた音や言葉を認識する意味の“聞く”や自分の知りたいことや質問したいことを尋ねる意味の“訊く”，聞こえるものの内容を理解しようと思って進んで行く“聴く”などがある。ここでは生徒の発表での意味を“聴く”の字が当てはめられる。相手の気持ちに寄り添うことの重要性を感じていることが垣間見られる。

ウ 自己感情コントロール

①については、“緊張が少し強い方が、成果が出るということと、緊張がかなり強い時は、自分に“できる”と言い聞かせるということが大事ということが分かった。”“緊張しなさすぎても、緊張しすぎてもダメだから、気持ちをコントロールすることが大切だと分かりました。”という記述が見られ、これは自分自身の気持ちをラーニングゾーンに位置させる方法を理解したと考えられる。③については、“自分に合ったコントロールの仕方を見つけて自分の感情をコントロールしたいと思いました。”“テスト前、「バクハツ」のようになると勉強してきたことが台無しだから深呼吸をしてリラックスしようと思った。”といった、これらの記述から、自分自身を客観化し、対応方法を学んだことで自己効力感の高まりにつながっていると想像される。

エ 問題解決スキル

①については、“行動するときは、メリット・デメリットをよく考えて動いたらいいと知れた。”“周りをちゃんと見ることです。予測するためには周りの人の行動も大切になると思うからです。また一歩先を見ることです。”ここで、読み取れるのは、生徒の考え方が、自分の視点から相手の視点に転換する意識につながったことである。③については、“時と場合、相手の心情に気をつけて、人間関係を大切にしたいです。”“まずは状況を見て判断していくようにする。”といった記述から、問題解決のため、あらゆるメリットやデメリットを考えて行動することを考えた結果、視野の拡張が行われている。視野を広げることで、見えなかったことにも視点が置くことができるようになり、思考の広がりにもつながっていくきっかけになっていると考えられる。

(3) 不安“なし”の回答

4回の学校生活アンケートを行った結果、各項目とも不安“なし”と記述した生徒は、回を重ねる毎に増加していった。学習については第1回9%，第2回11%，第3回19%，第4回30%，先生については第1回37%，第2回65%，第3回67%，第4回84%，部活については第1回39%，第2回37%，第3回46%，第4回58%，友達については第1回24%，第2回53%，第3回61%，第4回68%となった。懸念すべきことは、回答を正直に行っていないのではないかと思われる生徒が数名見られることである。Google Formsで回答であるた

め、送信された時間が表示されている。それを確認した時、毎回早く送信している生徒がおり、不安が全くないからという可能性もあるが、消極的な協力姿勢の生徒もいるのではないかということも考えられる。

4 考察

(1) 不安感の変動と支援のあり方

アンケート調査を実施することで、児童または生徒の不安感の変動をつかむことができた。また、KHCoder による記述内容の分析を用いたことで、さらに具体的に活動内容による不安感を示すことができた。これを踏まえ、中学校教員が生徒一人ひとりへの指導や支援をより細やかにしていくことを考えていかなければならない。

学習については、教科担任制や授業展開の速度の不安については慣れていくことで、不安感は少しずつ解消されていく。各教科覚えなければならない内容の増加や定期テストへの不安は、変動していくものになる。定期テストに関しては、森田ら（2017）は、テスト不安が学習行動に妨害的で悪影響を及ぼすとは一概にはいえないが、当人の自己効力感が高い場合など、“適切な学習行動をとることで、テスト不安を低減できる”という認識を持っている場合は、促進的に機能し得ると考えている。進路への意識を持たせ、難易度の高い定期テストを作りがちではあるが、習得すべき学習を確認していくことを優先した内容にすることで、学習意欲をもたらし、自己効力感へとつながっていく。

先生については、7月のアンケートでは不安“なし”記述が84%となり、教師と生徒の関係が良好になっていったと分かる。大前（1998）は、生徒は教師に認められたと感じれば、自己評価も高くなり、学校生活が充実していると感じると述べている。一方で、教師に認められていないと感じると、関係が悪化し、教師をストレスサーと感じてしまう。教師側は生徒一人ひとりを“認める”ことを意識することが重要になる。

部活については、生徒は4月中にはどの部活もしくは校外のスポーツクラブに入部するかもしれないかを決めている。宮代・五月女（2020）は、学校生活を安心しておくために、部活動や地域のクラブチームへの参加が効果的で、個人や集団の目標達成のための活動が、生徒の不安を軽減しているとしている。活動をすることのメリットも大いにあるため、迷っている生徒への声かけはあった方がよい。また、吉村（1997）部活動への満足感が高い部員は学校生活全体への満足感も高かったと言っている。教師が思う以上に、生徒にとって部活の意義は大きい。

友達については、生徒にとって、友達作りが上手くいくかどうかは1番大きな悩みであるだろう。石田・吉田（2015）は、親密な友人関係の形成といった社会的な要因が、学習や学校に対する適応感にも影響を及ぼし、また入学後の早い段階において親しい友人関係を形成できるかどうかは中学校での適応において重要であると説明している。その中で、関係性がクラスから他クラスそして先輩とコミュニケーションの場を広げていき、視野の拡張がみられていると思われる。

(2)SEL 4 単元の学習効果

SEL については、自己感情理解・他者感情理解・自己感情コントロール・問題解決スキルの4単元を設定した。特に、これらの学習は、10分の短時間でありながら、教室内に心理的安全性が保たれる空気感を醸成する効果があった。

自己感情理解では、振り返り分析から自分の考えや気持ちを正直に、場に応じた言い方をするのが適切な自己表現で、それをする事で相手にもその考えや気持ちが伝わっていくことを学

べていたことが確認できた。自分で自分を大切にせず、相手に自分を大切にしてもらおうと思っているだろうけれど、人間のコミュニケーションの特徴から不可能であることを踏まえて授業設計したことが有効だったと考える（平木，2000）。

他者感情理解では、相手の気持ちに寄り添うために、“聴く”ことの重要性に気づいた生徒がいた。対人トラブルの際、考えを主張し合うのではなく、聴き合うことが大切で、互いを理解し、同じ方向を見ることができるよう話し合うことの重要性に生徒が、視点を置くことができたことは成果である（植田，2012）。

自己感情コントロールでは、自分自身をメタ認知し、緊張の高まりや不安が増幅した際の対処法を学べ、自己効力感を感じた生徒がいたことは、自己効力感に作用するとされる4要因のうちの“代理的経験”と“情動的喚起”が働いたと考える（バンデューラ，1979）。

問題解決スキルでは、視点の転換が見られていることについて、相手の気持ちを推測し、理解する能力である役割取得能力が働き、視野の拡張や思考の広がり結びついたことが推測される（セルマン，1976）。

5 課題

小学校卒業後、スムーズな中学校生活への移行のために、生徒の不安感をつかむことは重要と思われる。ただ、現状としては多くのアンケートが行われ、生徒からすると、何度もアンケートをすることで煩わしさも出てしまう。既存のアンケートから、生徒の不安感をつかみ、実際に生徒へアプローチする仕組みが必要となってくるのではないかと考える。また、SELについても、現状ではプログラムとして総合的な学習や特別活動で実施することは厳しい。年に数回程度なら可能だが、小泉ら（2013）は、社会的能力を向上させるためには、7回以上の授業実施が望ましいとしており、その回数を行うためには、終礼の時に行う、モジュール時間を活用するしか現状では他はない。学校という環境内だけを考えれば、下校前に行うことは定着や連続性について、効果が低いと考えてしまうが、生徒の1日は学校だけではないことや継続的に行う活動という観点からいえば、終礼時でも効果はあるだろう。そして、アンケートとSELが連動した運用ができれば、生徒の学校適応は高まると確信している。

参考文献

- ・アルバート・バンデューラ（著）、原野広太郎（訳）（1979）『社会的学習理論』金子書房。
- ・石田靖彦・吉田俊和（2015）「中学校入学後の友人関係が学校適応感に及ぼす影響－関係の親密さと友人の特徴の効果に関する縦断的検討－」『愛知教育大学研究報告』教育科学編，第64号，p67-73.
- ・植田寿之（2012）『物語で学ぶ対人援助職場の人間関係－自己覚知から成長へ』創元社。
- ・小泉令三，山田洋平，箱田裕司，小松佐穂子（2013）「心理教育プログラムの実施回数による学習効果差の検討－小中学校におけるSEL-8S学習プログラムの実践を通して」『日本教育心理学会第55回総会発表論文集』，p342.
- ・セルマン R. L.（1976）Social cognitive understanding. In Lickona, T. (Ed.), Moral development and behavior. NewYork: Halt. pp.299-316.
- ・中島義実，大西彩子，原田克巳（2022）「中学校進学前の不安に関する記述データによる研究－小学校6年生時の記述と中学校1年生時の回想との比較－」『甲南大学紀要文学編』第173号，p145-150.

- ・平木典子（2000）『自己カウンセリングとアサーションのすすめ』金子書房.
- ・宮代こずゑ・五月女裕昭（2020）「中学生が抱えている多様な不安およびその関連要因に関する調査：生徒指導上の諸課題に関する一考察」『宇都宮大学教育学部研究紀要』第70号別刷，p 83-92.
- ・森田愛子・福屋いずみ・船越咲（2017）「中学生のテスト不安および自己効力感と学習行動との関連」『学校心理学研究』，第17巻，第1号，p45-57.
- ・文部科学省 初等中等教育局児童生徒課（2022）「令和4年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」文部科学省，
https://www.mext.go.jp/content/20231004-mxt_jidou01-100002753_2.pdf，（参照 2023-01-15）
- ・吉村斉（1997）「学校適応における部活動とその人間関係のあり方ー自己表現・主張の重要性ー」『学校心理学研究』，第45巻，第3号，p337-345.